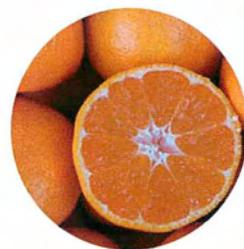


ミカン(温州)



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
収穫直後 または収穫前	樹勢・根の早急な回復、 ダニ防止	●根っ酵素3～5ℓを適宜薄めて(300倍)灌水 もしチッソ切れなら硫安10～20kgも散布。
秋肥(元肥) [11月上旬]	1年分の基本となる土 作り、樹体の基礎体力 を作る栄養供給	●ラクトバチルス600g ●堆厩肥(牛糞など)500kg(多い方がよい)または米ヌカ120kg ●硫安50kg ※複合有機肥料を使う場合はチッソ成分10kgとする。 堆厩肥が鶏糞等で、チッソ成分が多い場合、硫安を減らす。 ●畑の大将<青>30～80kg ※カルシウムをしっかり効かせて土作りをする。 ※露地のミカン園は、ほとんど土壤が酸性化している。pHを測定し て必要な分量の畑の大将<青>を施用。 ※上記4種を同時に施して、浅耕する。(土と軽く混ぜる) 施肥位置は樹冠の下から先まで、広く均一に散布する。 ※秋肥(元肥)の一部は冬前に樹体に効き、大部分は冬期を通じて 土壤微生物により醗酵状態にされて、春から吸収される。 翌春の果実の油胞の数は秋のカルシウムで増えます。
春肥 [2～3月]	春の枝葉と、花に栄養 分を供給	●硫安10～20kg ●畑の大将<青>10～20kg ※根が動き出す前に、春先からの枝葉と花の栄養を補給。 ※チッソのみが効き過ぎてカルシウムが足りないと、花の受粉・着果・ 初期の果実形成がうまく行かず、ジョウノウが少なくなる。しっかりカ ルシウムを効かせる事。 ※もし秋肥に施用していない場合は、ラクトバチルス等も春に施用。 秋肥を十分に施した場合は春肥は少量に。
開花・着果期	果実形成促進	①花咲くCa液500倍を葉面散布(開花10日前に)
	初期細胞肥大	②根っ酵素500倍液を葉面散布(着果直後に)
肥大期の 葉面散布	栄養の健全化	③花咲くCa液500倍(果実2.5cm以後)
	果実肥大、樹勢維持	④根っ酵素500倍液を7～14日の間隔で繰返し
	葉を厚く、黒点防止	⑤花咲くCa液500倍
夏肥(実肥) [6月]	樹体の栄養バランスを 健全化	●硫安20kg ●畑の大将<青>20～50kg ※夏へ向っての体力作りと果実肥大のためにはチッソ肥料の投与 が効果的。しかし梅雨期にはチッソ過多になりやすいので、カルシウ ム施用が大事。今秋の果実の成熟とともに、来春の花の花芽分化 にも、カルシウムをしっかり効かせておく必要がある。(果実の仕上げ 段階まで効果あり)
果実の仕上げ [収穫30日前]	増糖、着色促進 浮き皮・甲高の防止、 腐敗防止	●畑の大将<青>20～40kg を収穫40日前に散布(夏肥にカルシウム施用の場合は少量を) ※土壌pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将<赤>を施す。 ●花咲くCa液500倍を収穫20日前、10日前に葉面散布

※年間チッソ施肥量は20kg程度が適切。多すぎる場合は徐々に落とす。
カルシウムは上記の基準から適当に加減して、通常は年間100kg以内とする。
チッソ多肥の場合、バランスをとるためにカルシウムの施用量も3～5割増やす。